九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

九州大学
人社系協働研究・教育
コモンズ

掲載日（2023/4/3）

書籍の概要

本書は、2016 年 6 月に行われた政治経済学・経済史学会の春季総合研究会「経済史学とフレームワーク―その協働と相克の過程から」での報告と討論を基に作成された、論文集です。もとの企画のタイトルが示すように、歴史学全般をまんべんなく議論するのではなく、経済史が議論の中心になっています。「虚心坦懐に史料を読めば、自ずと普遍的真実が明らかになる」という研究姿勢（素朴実証主義）が歴史学で批判されて久しいですが、経済史は数値という一見客観的な素材を扱うことが多いだけに、ともすれば素朴実証主義に引きずられやすくなります。また、経済史家の中には、様々な経済理論を使う人もいます。これらの経済史の特徴に対し、先達がどのように向き合ってきたのか、本書では、戦前からの先人の業績も振り返りつつ、今後の歴史学や経済史の方向性について、日本史、外国史それぞれの観点から考察しています。

歴史学の縁取り方：フレームワークの史学史

恒木健太郎、左近幸村　編

東京大学出版会/ 288 ページ/2020 年 9 月出版

著者から一言

本書の表紙と裏表紙は、私が選びました。いずれも、19 世紀前半のドイツの画家、C.D.フリードリヒの絵です。単純にきれいだということもありますが、本書の内容とも関連しています。表紙（窓辺の婦人）は、窓枠＝フレームワークから外を眺める女性ですが、これはもちろん、研究者が自分の部屋（研究分野）から、窓枠を通してしか物事を見られないことを、示しています。対照的に裏表紙（雲海の上の旅人）は、山の頂から全体を眺めています。私たちはこのように全体を見渡したいと思いますが、実際はとても難しいことです。学問というフレームワークを通じて、私たちがいかに物事を見つめるかを、これらの絵に託しました。

経済学研究院　左近幸村

目次

はじめに　（左近幸村）
序章　「事実をして語らしめる」べからず（恒木健太郎）
第 1 章　戦後日本の経済史学（恒木健太郎・左近幸村）
第 2 章　「転回」以降の歴史学（長谷川貴彦）
第 3 章　「封建」とは何か？（武藤秀太郎）
第 4 章　経済史学と憲法学（阪本尚文）
第 5 章　歴史学研究における「フレームワーク」（粟屋利江）
第 6 章　「小さな歴史」としてのグローバル・ヒストリー（左近幸村）
第 7 章　読者に届かない歴史（小野塚知二）
あとがき　（恒木健太郎）

【お問合せ先】
九州大学 経済学研究院　左近幸村（サコン ユキムラ）
E-Mail：sakon.yukimura.112*m.kyushu-u.ac.jp [*を@に換えてください]